

終戦前後の二つ

二四回生 奥田陽一

「空襲でやられた」と母がススと泥にまみれて御影から歩いて芦屋の祖母の家に転がり込んできたのは、今から思うと昭和二十年六月五日の神戸大空襲の日でした。私はその前日祖母が連れに来て、芦屋に泊まったので空襲に遭わずに済みました。祖母は「虫の知らせ」があつたと長いこと言っておりました。翌日は母と祖母が焼け跡を調べに行くというので、一緒に行くことだったのですが「途中は焼け跡だらけで牛や馬それに人の死体もあちこち転がっているから駄目」と連れて行つてもらえませんでした。私はその何日か前、三宮のそごうで買ってもらったばかりで、ほとんど遊んでいない木製の三輪車とスケートがどうなったか、それだけが心配でたまりませんでした。焼けこげた鍋などを持って帰った母から、隣組全員で防空壕を見せてもらった近所の薬局のご主人が壕の中で亡くなったことを聞きました。子供の目から見ると怖い位深い穴の

中に階段で下りるようになっていて、電灯もついた立派なものでしたが焼夷弾攻撃には無力だったので。勿論他の家財道具とともに三輪車とスケートは跡形もなかったそうです。

私の記憶は長いこと汽車に乗って、東京の田端から御影に着いた時から始まります。少なくとも東京大空襲のあつた昭和二〇年三月より以前の事です。田端でのことは全く記憶に残っておりません。

思い立って一度出生地のJRの田端駅でおりてみました。台地になっていて駅前には立派な「田端文士村記念館」があり、昭和の初め頃芥川龍之介、平塚らいてうなど多数の文士・芸術家が住んでいたそうです。私の生まれた番地のそばには室生犀星が住んでいたとか、東京大空襲でほとんどが焼け往時を偲ばせるものは少ないのですが、切り通しを隔てた芥川龍之介が自殺した家の辺りだけは類焼を免れ、当時そのまま残っています。毎月記念館の主催で「昭和文学散歩」と称して一帯を案内・説明してくれる会があり、昭和文学史に興味をお持ちの方は参加されたら面白いと思います。

落ち着いた家は阪急御影駅の近くにあり、歩いてすぐのところには鉄筋コンクリート三階建ての立派な国民学校がありました。祖母に手を引かれてそばを通った時、もうすぐここに通うことになるよと言われたのを覚えています。父の何度目かの出征を幟を立てた隣組の人達と見送りました。防空演習があつて母についていったこともありました。夜になると灯火管制といつて黒いカーテンを引いたり、ただでさえ暗い電灯の回りを黒い布で覆っていました。空襲警報発令と解除の二種類のサイレンも覚えていますが、千里第二小学校で小使いさんが鳴らす鐘がサイレンに変わった時は、戦争を思い出し、いやな気持ちになりました。

芦屋でもしばしば空襲警報のサイレンが鳴りました。阪急電車の芦屋川駅周辺も空襲を受けて焼け跡だらけになり、全焼した駅は白木の板で急造されました。阪神国道沿いが火の海になっているのも見えました。

母と一緒に祖母の家にそのまま世話になりましたが、食糧難の時代で大人は大変だったと思います。祖母と母が買い出しといつて風呂敷に着物など包んで出て、野菜などを持って帰ってきました。特にひもじい思いをした記憶はありませんが、代用食と称して白い

サツマイモを沢山入れたお粥がとてまずかったことは覚えていますが。それ以来サツマイモは嫌いでしたが、千里山で食べた石焼き芋のオイシイのに驚き、また食べるようになりました。お米は貴重品と厳しく教えられたせいか、今でもお茶碗にご飯粒は残さないし、お米をとぐ時に流れた米粒は全部拾う習慣が残っています。

そのうち出征していた父が帰ってきました。庭で短い竹を振りかざして「突貫ーーン」と戦争ごっこをしていたら、石臼で粉をひいていた父と母と呼ばれ「戦争が終わったからそんな遊びはこれからはやったらあかん」といわれて初めて終戦を知りました。叔父に連れられてよく三宮に行きましたが、一帯は焼け野原で、焼け跡には食べ物や着物を売る闇市がならび大変な人出、ガード下にはポロを着た私と同じような年格好の戦災孤児がたむろしていました。細い道から出てきた進駐軍のジープにぶつかりそうになり、鬼のような顔をされたMPに判らない言葉で怒鳴られ、叔父が何か一言二言あやまって無事に済み、叔父はえらいなと思いました。

芦屋を出て香栞園の父の実家にしばらく身を寄せた後、千里山に引越して来ました。駅をおりて坂を上がると大きな噴水があり「焼け跡」や「ブラック」といった空襲の痕跡が全くなく、まして「闇市」もない千里山に驚くばかりでした。ただ、防火水槽の代わりに台所の横に大きな水瓶があり、水をためているのが不思議でしたが、今号に載っている千里山人先生の「千里山開発物語」を読んでその当時は断水が多かったのだと知りました。

私が千里山に来た大体の時期も「千里山開発物語」で判りました。「千里山厚生園」駅が「千里山遊園」に戻ったのが昭和二十一年四月七日、「大学前」駅の復活が六月二十五日、駅名を覚えるのが好きだった私は「千里山厚生園」は全く知りませんが「大学前」の復活はよく覚えていますが、枕木を積み重ねた上に板を張った粗末な駅でした。従つて昭和二十一年四月から六月の間、おそらく四月に越して来たようです。

その夏、多分軍隊で父と一緒に来た若い兵隊さん（と呼びました）が家に来て、父と食事をしたあと駅の反対側にある下宿まで送つていきました。その途中にあった初めて見る木造の学校が翌年から通うことになる

千里第二小学校でした。

千里第二小学校に通い出してしばらくして「フジヤマの飛び魚」古橋選手の世界記録樹立したり、「鐘のなる丘」が始まりラジオにかじりついたものでした。

